

法政大学史学会々報 第4号

法政大学, 史学会

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学史学会々報 / 法政大学史学会々報

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

28

(発行年 / Year)

1952-07-05

法政大學



史學會之報

(第4号)



(1952 · 7)

法政大學史學會發行

目次

題字 藤井甚太郎
表紙画 渡辺省三

巻頭に題す	1
製鉄遺跡の発見	2
郷土誌研究雑感	23
史蹟調査報告(深大寺)	4
例会記事(和田清博士「東洋史家の見た古代日本」)	6
関西方面研究旅行	6
日程旅程及参加者名簿	7
第一日	7
第二日	12
第三日	15
第四日	17
感想	20
随筆	20
会務報告	25
會計中間報告	26
旧制大学院学生並に研究題目	27
新入会員紹介	26
史学科及関係講義題目(昭和二七年度)	27
学内便り	24
研究室便り	28
編集後記	28

寺沢 主税
柳 繁
桜井 芳郎
宮原 美代子
藤井 甚太郎
酒巻 正三郎
寺沢 委員
會計 委員

安岡 委員
山下 文彦
教授 板沢 武雄
(新卒)

巻頭に題す

法政史学会誌も茲に愈々第四號の発刊を見るに至つたことは、誠に御同慶の至りと申さねばならない。

時隔、我等は、今日、独立日本を迎ふるの喜びに会つた。この占領政治下の七年間は、二千六百有餘年の日本の歴史に、かつて存在しなかつた意味を持つ年月である。そしてこの時に生れ会つた我等歴史研究者は、内外を顧みて、貴さ史眼を養い得たのであつた。併し尚學問上、未解決の論兵が多く残されてゐる。我々は中正なる史觀に立つて、これを解決して行かねばならぬ。法政大学の史学科には、今や法政史学とでも云ふべき一學風が、徐々に醸成せられつゝあるやに見ゆる。この萌芽は素直にそれを培つて行けば、やがて確に世人の仰ぎ見る鬱々たる大木となるであらう。又かく成長させることが我等の義務である。これが又一面、独立日本への奉公の途であると思ふ。

製鉄遺跡の発見

板沢 武雄

最近昭和二十七年三月十三十四日、岩手県上閉伊郡大槌町大字大槌才十一地割二百七十五番大ケ口(俗称マケラズ)で、雨田工事のための客土を採取中に、土器と鉄滓等が発見されたといつて、郷里釜石市に居った私のところに出土したものを持って後場の人々が報告してくれた。三月十八日現地を一見して製鉄遺跡として重要視すべきものと認めをから、その地奥の工事を中止させ、簡単な現地の状況と土器等の出土箇所等のメモをとつて、町長から県の文化財保護委員会に届出させることにして歸つた。その後五月三、四、五、日東北大学教授伊東信雄氏が出張されて詳細な調査をされた。その時、私は参加することが出来なかつたが、伊東教授が大槌からの帰途、釜石に立寄つて下さつて大体のことを承つたが、問題は中々複雑であるだけ、その結果に期待されるところが大なるものがある。縄文晩期の遺跡の上層に土師を伴う層らしいところに製鉄の遺跡が存する。製鉄の火窪ホドと思われるところには、石を料りに段々に三段位に左右上を積み重ねて煙を誘導する装置かと思われものがあり、円筒土器(四徑三種、厚さ二種位)の長さ五六寸前後の破片が数箇あり、その一方の先に鉄滓の凝着したものの、又円筒が鉄滓で充た

る。そしてはじめこの円筒二箇が五寸位の間隔をおいて三〇度位の角度をもつて埋つてあつたのを私が見ておいたこと、尚約三〇度位の厚さの粉炭の層も幅五又位あつたことも附記しておく。伊東教授調査の時はすでにこの部分は破壊されていたそうだが、釜石製鉄所分析課に依頼して鉄滓と土管との詳しい分析の結果を報告してもうつたが、そのコップーを伊東教授にも差し上げておいた。製鉄所の意見ではチタンの含有度の高い、低温度製鉄ということであつた。以上のことだけなら比較的簡單であるが、伊東教授は同一地域から錢貨二箇と腐蝕してしまつた刀子杯のものと鎌と二つの鉄器を発掘された。また前記の火窪の底部と思われるところから砂鉄を採取されたことは、問題を更に複雑なものにしたようだ。以上極めて簡単な報告を記すにどども、一切をあげて専門家である伊東教授の報告書の発表に期待したい。

マケラズ遺跡の概報は以上ですんだが、この機会にもう少し紙面をもらつて製鉄のことを書いて見よう。弥生文化遺跡の調査研究がこの頃著しい成果をあげ、わが農耕文化の解明が進んだことはよろこばしい。更に私は農耕文化にも、その他の文化にも、革命的な影響を与えたに相違ないわが国鉄文化の研究の、盛んに

なることを冀望するものである
わが国の鉄文化の研究にあつて私の冀望する点を

思いつくまゝ、列記する。

一、東洋特に朝鮮半島方面の研究に期待する。

鐵の古文は鉄である、爰は東夷の表で古くから東方の人を意味する。製鐵の起りは東方にあつたのではなからうか。臨鞮の語が蒙古語から出たという説も參考に値する。魏志の韓伝辰韓の條に「百出鐵、韓滅後皆從取之、諸市買皆用鐵、如中國用錢、又以供給二郡」とあつて日本人も中國人も半島から鉄の供給をうけた。製鐵技術の導入も考えられるわけであるが、その場合半島に長い間占拠した日本人と大和朝廷の勢力とが当然考えられるわけである。古蹟出土の鉄の甲冑や鎗輪の甲冑と大陸との關係をもつと明かにしたいものである。仁徳天皇紀十二年秋七月「高麗國貢鉄盾鉄的」というような記事も示唆に富む。

二、出雲地方に於ける砂鉄の製鍊

これは多くの人々によつて注意され研究されている。後園一氏「古来の砂鉄製鍊法」、西尾銈次郎氏「日本鐵業史要」、結城次郎、磯貝勇向氏「中國地方に於ける砂鉄製鍊法の史的的研究」、山田新一郎氏「神代史と中國鐵山」、後藤守一氏「上古時代の鋼と鉄」、前田六郎氏「和銅和鉄」、大日本林制史資料板江藩、外多教の文献がある。土屋喬雄氏等による「マニユアラケ」などでの砂鉄製鍊業の研究があり、今後の研究に対する懸念が決して少なくない。

三、岩手県下の製鉄史

釜石を中心とする岩手県下の製鉄史は西洋の近代製鉄法をとり入れてからの研究は随分ある。「大島高任」の伝記はその出発点を示すものである。ところがそれ以前の製鉄史については殆ど顧られていない。筆者は文献の蒐集をつとめてかなりの分量に達しているがその内容については他の機会に譲る。たゞこゝで一言しておきたいことは、釜石地方には古いミツホドの趾と伝えるところの多いことである。ミツホドは恐らく水火漕で水車をフイゴの動力に利用した旧式製鉄装置であらう。もう一つ申添えたいのは餅鉄のことである。これは地方ではベンテツと発音している。磁鉄鉱が多い同地方の川底には拳大の自然に分離された鉄分の極めて多い鉄鉱が河水に磨かれて丸味をもつたものになつて拾ひも小さい丸餅位なのが、今は少なくなつてはいるが以前は沢山あり、この餅鉄を利用した製鉄が、西洋式をとり入れる以前に行われらしいのである。

四、製鉄の技術上の温度のこと。

製鉄技術の上から、特に原始的なそれを考える場合に、是非知りたいことは、原始的な装置で幾度位までの温度を出せたかの問題であり、土器製作に於ける温度の推測がもつと精密になるといふと思ふ。

附、釜石製鉄所副所長川村吟次郎氏の御好意で同所分析課で分析された結果と参考意見とを寄せられたから

空に添えておく。

一、鉄滓分析成績表

成分	SiO ₂	FeO	Fe ₂ O ₃	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	S	MnO	P ₂ O ₅	TiO ₂
試料 No.1	2718	3828	897	702	657	208	0.10	0.72	0.06	4.15
試料 No.2	2772	5303	589	580	432	224	0.09	0.65	0.05	2.15

No.1 多孔質海綿状

No.2 緻密質餅鉄状

鉄滓に対する参考意見

SiO₂ と CaO 量より判断すれば、製錬に当つては酸性操業であり、低温還元が行われたものゝ如く、煤熔剤が添加されていたかどうかは判断出来ません。酸化鉄が多く且つ酸化チタンの割合に多いのは低温還元であつたことを裏書しています。

酸化チタンを含んだ鉄鉱石（岩鉄）或は砂鉄（不明）を使用したのではないでせうか。

S 及 P₂O₅ の低いのは燃料として木炭の如きものを使用したと推定されます。

二、土管土器の分析成績表

種類	SiO ₂	Fe ₂ O ₃	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Spinel	S.K	見かけ重量	焼成温度	吸水率	
土器	5690	724	2344	135	145	950	(14603)	1/6	276	149	458
白磁土器	6280	335	3264				(14703)	30	257	180	227

土管土器に対する意見

該土管は竈から強風を送る通風管兼羽口として使用し、附近の粘土を選別の上成型し簡単な炉で木材を燃料として軽く焼成したものと推定されます。

史蹟調査報告

深大寺

夜来の雨は早朝に至るもやまず、参加を予定していた人々も取止めとあきらめかけたが、午前九時半の集合ではあるし、予報も雨はあがるので、一縷のぞみを返していた。果せるかな雨もやみ、ほつくと集合地、新宿駅西口京王線改札前に集った。

京王線を国領で下車、こゝに本日案内役湯沢氏とれに三年の佐藤氏も待つて居つて合流。折から沿線各駅に張つてあつた深大寺のポスターには調布又は柴崎下車となつてゐるのに、一行はその中間をとる独自のコースを送んだ。爲に進路はまもなく茅畑に突入、いさゝか難澁したが、田圃の情趣は満喫した。漸くコースに乗り三十分余りで深大寺に着くと、先着の坂井、滝島両氏が首を長くして待つていた。これで藤井竹内丸山三先生に卒業生を学生を加えて総勢十六名となる。一同本堂広間に上り、こゝで任職の話を伺つた。仲々

学識豊かな説明ぶりに皆うなずかされる所が多かつた。

深大寺は天平五年、満功上人の開基にかゝり、はじめ法相宗であつたが後天台宗に改められた。創立以来盛衰はあつたが存立を全うし今日に及んでいる武蔵有数の古刹である。官寺として建てられた国分寺が、今はたゞその跡を留めているに過ぎないのに、民間の信仰の中に興つた民寺としての深大寺が未だにその生命を失はないでいることは、民衆の力の根強さを反映しているといえよう。室町時代には吾田谷城主吉良氏が寺塔を再建し、後小田原の北條氏にも厚く遇されていた。降つて徳川氏も寺領五十名の朱印状を与え守護不入の地として保護した。現在の建物は正保三年(三代将軍家光の頃)の天災以後のものである。

当時の寺堂で深大寺を訪れる者の最大目標である金銅釈迦如来像は、残念なことに国立博物館奈良分館に於いて開催中の大佛開眼千二百年記念天平白鳳展覧会に出陳中である。この像は高さ二尺七寸三分の筒像で、微笑を含んだ面、衣文の調子等その様式から、関東では唯一つの白鳳佛とされているものである。これの製作については関東関西両説がある。どうしてほつんと関東のこの地にこの杯は遠呂が伝わっているのか、疑問とされる点であるが、遠い所からこれだけのものを運ばれたとも考えられないから、当時関東にこれだけのものを作る技術を持ったものが居たと解されよう。

これには三韓帰化人の存在も關聯して考えられる。しかしそれなら他にも関東に伝わる作品があつてもよいわけで結局どちらともはつきりしない。

この他当寺に伝わるものに、寺名の由来するといわれる深沙大王像、三大師像、弁登上人筆当山縁起、参議藤原公尹筆当山縁起絵巻物、融通念佛縁起絵巻物、永和二年(一三七六)の銘のある鐘等がある。

又この辺は縄文式土器や石器が出る所で、石器の製造された場所ではなかつたかとも考えられる。この境内附近は各所に清水が湧いて居り、遺跡遺物を残した人々もこの水の恩恵に浴したものであろう。

大要以上の杯な話で、終つて当山縁起の絵巻物を、出土の石器を重しにして、又他に徳川將軍からの寄進状などを見せてもらつた。

その場で昼食をとり、食後の歓談に盡きぬ名残りを惜しみながら同寺を辞し、境内で篠宮氏のカメラに収まり山門を出た。

門前の店で深大寺名物のそばに一同舌つゞみをうち五月の陽光をさえぎる樹陰で、滝しぶきを背にしてのどかな一時を過ごした。深大寺そばと云えば、江戸人の趣向に投じた武藏野名物の一で、太田蜀山人も自らせいろを買つて来る程の愛好者だつたと云われる。

又こゝは武藏野情緒の濃い環境なので折々句会も催されるそうだ。帰途豊かな湧水を利用した水車小屋の

脇を通る。この辺からは奈良時代の自然釉の瓶が出たと云われる。

そこからまもなく停留所に至りバスで調布駅へ出て史蹟調査の一日を兼ね日程で終えた。

尚当日は見なかつたが、附近には上杉氏の居城だった深大寺城址、延喜式内神社と云われる寺湊神社、これも延喜式に見える武蔵国多摩郡八座の一、虎柏神社等がある。

〔昭和二十七年五月一日(日)実施〕 慶爾記

例会講演

和田博士「東洋史家の見た古代日本」

昭和二十七年夏方一回例会は昭和二十七年五月二四日(土)午後六時半から、本学十三番教室に於て、総会に引続いて行われ、東洋史学界の泰斗、東大名譽教授和田清博士(本学和田教授の父彦に当られる)の講演を拜聴した。

博士は「東洋史家の見た古代日本」と題し約一時間余にわたり格式振らぬお話し振りで、自由且つ縦横に東洋史の視野から古代日本の盛時について論ぜられた。満鉄嘆詞として調査された高句麗の城址、女眞の城址の事キリシタン或は西欧諸科学のうけ入れ方に於け

る日本と中国の違い、西洋、東洋諸国と日本の武器の比較、ポルトガル人、オランダ人の東洋貿易等々、多くの例証から漸次説き及され、更に朝鮮半島の形勢などについて考察された上、結局日本が本常に強かつたのは、四一五子紀大和朝廷の盛期であり、国内が統一され、は強大となり、分裂すれば必然的に弱化する」と結論された。

関西方面研究旅行

法政大学史学科では、今春学生及卒業生の有志で左の如き旅程で関西方面に研究旅行を行い斯学の研究に得る所多く又会員相互の親睦を深にする上にも大いに益する所があつた。ここに参加者の文を集めて旅行の経過及成果を御紹介する

日程及旅程

出発 昭和二十七年三月二十九日(土)東京駅集合
午前十一時発大阪湊町行急行(大和号)

第一日(三月三十日)奈良

薬師寺、唐招提寺、垂仁天皇陵、
国史館(国立博物館奈良分館)、東大寺(大

湯殿、正倉院、二月堂、三月堂)

春日神社(春日野莊宿泊)

第二日(三月三十一日)法隆寺、——丹波市

法隆寺、中宮寺、天理教高安大教会、天理大

学附属図書館、天理大学、参考館、

(高安大教会詰所宿泊)

第三日(四月一日)宇治——京都

平等院、桂離宮、嵐山、(北乃家宿泊)

第四日(四月二日)京都

二條離宮、京都御所、京都大学、銀閣寺、

八坂神社、円山公園、知恩院、清水寺、方丈寺、

三十三間堂

京都駅発午後八時五十分東京行急行(明星号)

帰着 四月三日(水)午前七時三分東京駅着 解散

参加者

- | | |
|-----------|------------|
| 藤井甚太郎教授 | 八雲吾俊(新二回) |
| 田中三男(旧二回) | 西東盛子 |
| 黒崎菊江(新一) | 宮氣美代子 |
| 上塚千秋 | 酒巻正三郎(新三回) |
| 榎井芳郎(新二) | 都築主税 |
| 中山源太郎 | 安岡昭男 |
| 丹治健藏 | 寺沢 茂 |
| 野田 均 | 岡身居枝 |
| 篠宮忠男 | 他七特別参加 二名 |

計 十九名

◇第一日

三月三十日午前八時三十分奈良駅着、藤井先生初め

一行十八名に新剣一回卒業生の上塚氏ともこ、で合流、

東京駅から車中同行の曰文科の諸姉とも別れ、本日の

宿舎たる春日野莊へ向う、

取返の夜札は春の陽光に溶けて微塵をに見られない、

奈良駅屋上には夢殿の火箱と宝珠を象つた塔は、いか

にも奈良らしい風情をたゞよわせる。奈良のメインス

トリートを歩いて朱雀大路でも歩いてはる気分が深う、

春日野莊で朝食小憩の後、荷物を残して、近鉄奈良

駅よりオ一の予定見学地葉師寺へ向う。

奈良—西大寺向、右手には平城宮跡が見られる。眼に

映るもの凡々が寧ろ葉師の首を認はせる。

○葉師寺

一行西の京駅下車、徒歩数分にして裏小道から講堂

へと辿りつく。この辺一帯は皆ての平城京ありしとこ

ろ、おだやかな松並木と若々しい麥苗に囲まれ、寂と

した中にも雅な大気がはりつめてゐる。葉師寺、西の

京葉師寺。河とかぶわしい名であらうか。この寺の由

緒についてはあまたの人の知るところ。金堂左方の寺

務所にて観覽券、パンフレットを求めぬ。

幾たびか細胞の新陳代謝は認められるか、何時の昔に

も白鳳建築の輝を誇る金堂、惜しや修理中のこもの塔

ールを被つた東塔(三重塔)その真向に今今はなき西

塔の由来を語るその趾に建てられし碑、東塔の背後奥まつたところに建つ東院、及び南大門、金堂背後の講堂（もつとむ古いと思われる）。春光は心ゆくまで境内に溢れている。一同先ず金堂に入る。中央に本尊兼師如来像、両脇に侍る日光、月光像を含めて之、兼師三尊像と敬する。黒光のするその面はあくまで嚴として一千有余年の世を見つめてきたその面である。

金堂の右方々、奥まつたところにあるのが東院である。この中には白鳳彫刻の最高美を誇る聖観音立像が安置されている。衣紋を透かして見られる肉体の線はいわゆる中印度併教芸術の影響と言われ、像の前では若僧がこの聖観音の教義的由来を説明していた。現在のところこの東院内の環境は極めて悪い。というのは現在修禪中の東塔の重量約八百貫と言われる九輪の相輪が無難に置かれている。聖観音の左右に控える日光、月光は恐らく鎌倉期のもので思われる。又吉祥天女通像が右方に色彩可成りに損われ姿をどよめてゐる。

正午近く講堂を背後に一行カメラに収まり、西の京駅を左に見て近鉄に沿うて次の予定地唐招提寺へと歩を寄せる

○唐招提寺

兼師寺から徒歩十五分こゝ唐招提寺は近鉄尼ヶ辻からは凡そ五分である。

天平の末期、唐より来朝した鑑真和尚の創建にかゝるものがこの唐招提寺である

かつての平城京の中心地と言え、南大門のあたりはさすがにさびれ、凡そこれが名刹かとの感を探めたのも東の向、中門をくぐると左右にくつと流れる金堂のなだらかなしかも方の入ったその棟の力量感。和辻氏の「古寺巡礼」の一文が蘇る。氏は特にこの寺を囲む自然的環境、純日本の環境をこの寺のために讃えて居られるが、金堂の両翼を限る松の緑は惜しや、幾年か先にその左方のみを残して切りとられていたのである。然し金堂前面の柱列の美は遠きギリシアの古代をも惚はせるのである。金堂内に安置される本尊盧遮那佛、千手観音は何れも天平末期を飾る逸品であり、講堂内に安置される多くの木彫と共に、いわゆる招提寺式の名をほしいまゝにしている。あれこれと探しても見当らないのは鑑真像である。金堂横の土産物店のおはあさんに鑑真さんの像は何処かと尋ねる、へ鑑真を示してこの奥の南山堂とのこと、金堂の背後講堂側を通つて小高いところにある南山堂の前に立つ。入口の扉は固く閉ざれ、たゞ芭蕉の句碑、若葉しておんめの手ぬぐはばやの十七文字が温まつている。

やゝ小高いこゝ南山堂から眺められる講堂、金堂の屋根の線のすばらしさ又印象的と言ふべきである。

最後にとかく忘れ勝ちと思われるものに礼堂の右側、

南北に並ぶ二つの校舎があり、やはりこゝでも一つは修理中とある。カメラマンの篠宮氏残りの一つにカメラを向けていた。

恵哲提寺を去るに当り、再び先刻のおぼあさんに声をかける。「南山堂の鑑真さまは初時か陽の目を見ることもあるんですか」と。それは南山忌の六月六日には南無公開されるこのこと。青葉の六月それはこの恵哲提寺にはもつとも似つかわしい季節であらう。そごうにその上古の面影の胸に迫るを禁じ得ないのである。

一行はこの寺に別れを告げ、近鉄を横切つて、田家まはらな畠の中を緩歩しつゝ、前方後円の陵として知られる垂仁陵の池のほとりに待む。誰か「昼食をどろろ」と言い出す。青みがかつた池の囲りの芝生に腰を下す。こゝで八雲氏合流、池面はあくまで静寂そのもの、こもりと繋る樹木の下には、垂仁の帝がいらせられたる筈。昼食の間にもこの御陵の由來への好奇心から、ちらりほらりと小論が聞かれる。遠か東方には奈良の町々が霞む。あくまでのかかぬ古都の春の與ゆかしさかはりつめている如くだ。遠くの芝生の一組のアベツクがこの風物を振うのみ。昼食後、近鉄尼ヶ辻から再び奈良へ引返す。次の予定を急ぐからだ。

○奈良 国 宝 館 (国立博物館奈良分館)

奈良公園の一角、興福寺の東側に位する同館は、古都の風情を加味した近代建築で、天平から平安、鎌倉

に至る一連の佛彫彫刻がところ狭しと陳列されている。つい先頃東京三越で開かれた興福寺空の十六弟子像、七部衆が既にこゝに陳列されていたのには一寸驚く。詳細にわたつてのべる必要もなからうか、我回に於ける佛教芸術を鑑賞せんとする者には格好の手堅な殿堂であるうといふことを申し上げて置く。

○東大寺及び附屬の諸堂

天平の芸術と云へば東大寺。東大寺と言えは天平の芸術が運想されることはあまりにも常識的と言えよう。春日神社の山道の真向いを左へ折れて南大門へ向う。剝製の鹿を抱えてあちこちどうろつくカメラマンの姿は面白い。

こゝ東大寺は流石に修學旅行の生徒連で押すなりの盛況である。それだけに旅行記に描かれるには、あまりにも陳腐なものかも知れぬ。木彫仁王の巨像を横目で眺め、大佛殿へ入る。こゝ金堂盧遮那佛については、吾々が幼い頃からよく知つてゐる奈良の大佛である。気の毒だがあまりにも通俗的、だがせめて蓮弁蓋像の流暢、雄大なその無量の世界だけは見つめるべきであらう。

なお、大佛殿の前方には又余の金銅燈籠が立っている。これこそ世の修學旅行階級には見逃がされるものである。

このように佛前に一基建てるのが古式とのこと、この

八角の面には見事な天平のレリーフが施され、
 である。吾々が注意すべきはこのレリーフの童子であ
 り、冲天を飛翔する菩薩の像の自由さであろう。

カメラを据える。春の日を一ぱいに受けたこの廻廊内
 は修学旅行の学生達であふれ勝たぬ。それがひっきりな
 しく大佛殿を出入する。がしかし妙に賑々しいところ
 のないのは古都のせいでもあろうか。

一行中門を落つて、大佛殿の西北の一隅にある正倉
 院へと急ぐ。流石にこゝ松林の間は人影も少く、土塀
 に囲まれ閑として音がない。真まつたところの左側に
 は洋館があり、事務室が置かれ、皇宮警察の衛視が控
 えている。

藤井先生御存知の和田先生の好意で藤石伝元に非公開
 の院園内に入る。道々掛買のお話はこの正倉院の由来
 であり沿革である。かつての勅封地の庭へ現在でも宮
 内庁直轄であるか、一ぱいに生えつめた千古の苔、よ
 く手入れの届いた榎木、右手には近く完成を俟えられ
 る御倉秘蔵の品々を移管すると言われる鉄筋の庫の工
 事現場、その手前には聖護院校舎がある。

行詰つたところが即ち世にも有名な正倉院校舎の院内
 で一さきわ広い庭である。天平期以前の建築と伝えられ
 る西洋造木瓦葺、床下約九尺といわれるこの天平権神
 の壮大さのこもっている御倉、先づ吾々は之に驚嘆せ
 ざるを得ないのである。代々皇室直轄の下に管理され

てきたと言え、かつては乞食がこの床下に住んだと
 いう。その上一千有余年の濕気に堪えてきたのだ。正
 倉院なる語義はかつては何れの寺にもその空物を収め
 た倉を指すのであつたが、近代ではすっかりこゝの圓
 有名詞になつたという。一口に吾々はこの造りを救倉
 というが、扱は本が交るとして「あせ」と読むのは、
 その構造が例の壁に通ずるからだと掛買は説明される。
 内外不出とされてきたこの中に藏する千古の逸品は、
 毎年秋には宮内庁の許可證持参者には公開するそうであ
 る。この許可証は案外簡単に戴けるとのこと。(東京
 では宮内庁書陵部にて扱ふ)
 厚く礼をのべてこゝを辞す。

さて吾々はこゝで法華堂へ急がねばならない。東廻
 廊側に当る法華堂への道は可成り凸凹はげしく、狭つ
 ぽい。又少々の坂であることも案外辛い。流石に夜
 の夜れが出る。

日はまた高い。少しく高所にある二月堂は眺めるだけ
 として、俗に三月堂とよばれる法華堂の見事な側面四
 の前に立つ。生憎と雨時も廻つていたせいかな扉は閉ざ
 れてしまつてゐる。前の茶屋のおばさんに尋ねると、
 上の二月堂で聞いてごらんなさいという。幹事役の丹
 治氏の計らいで、重い扉を開けて戴く。

天平、鎌倉両期の建築より成るこの堂内、鎌倉期に成
 する礼堂の部分に吾々のもつとも憧れていたかの天平

の諸佛像が安置されてゐるのだ。すしんと重苦しい響きに南かれた堂内は無気味な程に薄暗い。一瞬にして神祕の空気に圧倒される。八角台座の中央にくんと高く屹立してゐるのが、本尊不空羅索觀音像だ。とかく寫真版で印象されるあの厳しさは見られず、あくまで柔和なお姿である。その左右その半ば程とも思われる審美的優麗な天平彫刻の笑を誇る日光、月光両菩薩像が待っている。

こゝに至つてはかの飛鳥白鳳の彫刻を完全に圧倒して去つてゐる。そのモデリングと言ひ、様相と言ひ、理想の上にはリアリズムの精神を見出してゐるのである。

この八角台座よりやや低く、矩形の台座上には四圍に四天王像があり、戒壇院のそれと比してはいさゝかの遜色は見られようが、やはり渾とすると足りるものである。その他弁財天、吉祥天、金剛力士、密迹力士各像が、どころ狭しと安置され、何れも天平期の粹を兼ねる諸佛像である。本尊背後に秘跡たる觀金剛神像が圓い扉の裏に安置されてゐる筈である。

彫刻の美はそのモデリングに於てであり、そのモデリングの描き出す陰影の中に見出すべきである。ゲートはかのヲオコーン洋像の最高価値を松明の灯の照明に於て見出したといふ。松明の灯により描き出されたヲオコーンの陰影のニュアンスこそ彼ゲーテの見出したものに他ならない。この三月堂に安置される諸佛像

が果して明るい陽の下ではいかうに眺められるであらうか。不気味な程に薄暗いこの堂内に於てこそ眞の不空羅索觀音であり、日光、月光菩薩像ではなからうか。二方から洩れる明りに於て描き出される陰影のニュアンスの中にこそ、この天平の彫刻は世界に誇るべき傑作として鑑賞に堪え得るのである。

かような佛像芸術の粹がひとり吾國にのみ藏せられてゐるといふことは、何ものにも代え難い民族的誇りであり、とかく自己嫌悪に陥り易い日本人には、よき判戦利たり得るに違ひない。永遠に吾々の脳裡に刻印せすにおかぬ映像は、自ら堂内右側にある安置佛寫真売場に歩を運はしめるのである。

今日の日程はそろそろ終りに近づいた。思い盡さない名残りを留めて、一行本日最後の予定地春日神社へと歩を移すのである。

○春日神社

のどかな春の日は言え、日はもうかなり西に傾く。春日の神社と言えは奈良に於ける天平期に属する建築であり、神佛混合の思潮に裏付けられた建築とされている。

三笠山（若草山）に連なる奈良の東北花山の中腹に位する。うね／＼と上り下りの多いだら／＼坂、日は折折に杉の葉に遮られ、いやな程にうる／＼小虫が囀りに集つてくる。天気の崩れる徴候ともあろうか、道々

に寄寄せに大童な土産もの店、流石に一両旅の疲れか、三々五々に板を登る。折々鹿の寄つてくるのも奈良ならではの見られぬ風物であり、春日の権現の申し子でもあろうか。

社殿に近づく。札拜を済まし、安堵の鞆をなで下す。

こゝも又一部修理中とあつては、よく／＼修理中の大和路に縁の深い巡歴らしい。古びた丹塗りの廻廊の朽ちんばかりの姿はあまりにも痛々しい。こゝ春日の宮は丹塗りの神社建築としての嚆矢とのこと、何処かの修学旅行の子供達の前で、案内人の老人が話しこくつてゐるのは面白い。腕に巻いた腕章からすると、どうやら案内人も免許割らしい。

帰路は流石に下り坂とあつて楽。十数分もかゝる道も、ものゝ五分である。途中から奈良公園へ入る。広々とした芝生は未だ褐色。鹿の群れも何だか少いようだ。白旗谷の西に傾いた。人影もすでにまばら。鹿を入れたとりたい皆與もさつぱり鹿が齧つて来ないとは、折角買ったせんべいも無駄。

今日の日程も全部完了したとは言え、見逃した処の一二あることは返す／＼も残念。又という日もあるだろう。一行疲れ切つた足をひきずつて宿舎春日野荘へ辿りつく。二階へ通される。よその庭とは言え、こゝ

春日野荘からのさかれる蓮池に松の枝の池に延びた絶好の庭、ゆつくりと湯に浸る。夜の奈良も歩きたい。それは無理だろう。夜ともなれば火の落ちた炉の如く静かな奈良。明朝は九時十五分のバスで出発と幹事氏の指示。

旅の夜はわびがあり、何とも言えぬこゝのあるもの。二日旅りの深い眠りに就かむとしよう。(寺沢 茂)

◇第二日

○法隆寺

「疲れ果て僧はりやさびくぎの音」一突又一突未だに笑話の一こま、こんな次才で昨日の疲れも吹飛ばし、若草山を後にして奈良金地をまっしぐら、見えてはかくれ、かくれては見える五重塔、人知れぬ愛着を感じながら「奈良の都は咲く花のおうが如く今盛りなり」と口ずさんだ。不安だつた天候もぼつり／＼と雨に見舞われいさ／＼かしんがいの至り、後髪を引かれる柳な魅力をもちながらも更に次から次へと心が及んで行く矛盾した気持だつた。しかし旅行ならでは味う事の出来なない情念なのであろう。越越に見る麦の葉なみ延々と続く耕作地帯、東京より暖いと思われたが意にあらず存外寒いのに閉口した。はるか彼方に昔を憶させる柳な松並木が見えた。

下車して見た法隆寺の外廊の土塀、破損して、いかにもみすぼろしさを感ずる程だつた。「柯んだ」と叫ぶいとまなく南大門を通過して中門の仁王像の前に立つた。柯か躍動的な力強さを感じた。立体感が出ておつて空物殿内の百済観音とはおもむきを異にしている。(勿論かく比較して見る事に問題があるのであるが)これが中門の左右に配置されており、中門の柱はエンタシスで胸にふくらみ及びを有し表面は粗澁の感があつた。垂木の如きに至つてはその配置状態や大きさも一定しておらず、又廻廊の伸び方においても左右同じでなく一見する所実に不調和の感をまぬがれない。廻廊にぞつしりと積みこまれてある焼失をまぬがれた金堂の柱を見た時感懐深さものがあつた。目前にはバラツタでお、わかれてあつた金堂の焼土、入夫が何やかや立働いていた。金堂の奥物の姿を見るチャンスに恵まれなかつたとはいへ、却つて印象的な一つの問題を見出し得たのであつた。それは他でもなく前述の黒こげの所が見える柱であつた。現代のセンスをもつてするならばギヤツプを感ぜざるを得ない。勿論釘は渡わられて居ず全部組立式のものであるが、その組合わされた所など全くの粗澁その物で、「なぐり切り」「なぐりけずり」とでも表現したい所、こういう場合に吾々はその時代の時代性というを時代思潮と云うか、歴史の発展段階の一契機として認識しなければならぬ事を痛感する。

こういう意味からあくまで現実にはその基礎をおさながら、この様な材料を媒介として過去に沈潜し批判して更に現実とその力強さを増大させ未来を形成すべく求められなければならぬ様に考へられた。

法隆寺再建、非再建の説もあるが、柯れにしても相当古いものである。中にはいたんでいる柱も数多く見受けられた。ひどくいたんでいる所には別の木が当てられてあつた。

多くの五重塔の中で最もさんせいのとれているのが目の前に立つ塔であるが、親念な事には改修の為に全体を眺める事は出来なかつた。更に金堂と五重塔とが同一に隣り合つて並んでいる。これは法隆寺の特色であると言われている。一般には塔を前にし後に金堂をおく四天王寺式がとられている。しかしこの四天王寺式の立場を取る学者も居る程であるが、中門を中心とした廻廊の伸び方の奥において矛盾するという見解におちいる。かんだんではあるが此の棟に見て来ると法隆寺の建築が一つの特色を有している事に気がつく。

この事は前述の如く一つ一つを見た場合、実に個々別々であつて不調和である。がしかし全体としてよく調和化され調和的美があらからさまに表現されている。美術はその時代精神と云うもの、反映であるとする事が出来るならば、当時は個々のものそれ自体と云う事は、むしろ全体を通過し全体から受ける調和的精神が

強かつたと推論する事も危険ではなからう。中門のエンタシスの柱の如きに至つても、ギリシヤ的な文化が他にも多少なり交渉ありしを考えられよう。芸術的な「美」は「調和」によつて高い価値が附されるのではなからうか。

更にすぐわきにある宝物殿に入ると焼文をまぬがれた破損の壁画、玉蟲厨子、百濟観音等があつた。百濟観音は今までに見られなかつた線の美しさを感じた。

しかし中国で佛像を岩壁に彫刻した其の風が残存しておる椽に見受けられる。立体感が出てはいるもの、横から見ると平板的な感じであつた。これは内からほとほとはしる芸術観でなしに、むしろ表現されたものゝ美しさで慈悲の精神を表現しようとした所に特色がある椽に思われる。そのやさしい姿は写実的だと云うよりもむしろ理想の姿を表現したものであらう。

外は雨がしきりと降つている中を夢殿へと歩を運ぶ。しかし殿内の救世観音菩薩像は見る事が出来なかつた。夢殿は八角形の特異な建築であり、奈良にある興福寺の南円堂はこの夢殿をまねたものと云われている。

○中宮寺

夢殿から三分で中宮寺につく。如意輪観音へ弥勒菩薩は尼寺にふさわしく暖しい姿で、今は黒光りに光り裏まつたうす暗い感じのする部屋に安置されてあつた。静寂そのものであつた。上半身には衣をつけず

腕のふつくらとした肉付き、眼の技法、やゝ写実的な感じを受けた。光線との調子を巧みにとつて見ると、線の生き生きとした感じがうす暗い中にくつきりと描き出された。同室に日本で一番古いと云われる刺繍があつた。天國の椽子が刺繍されてある実に美しいし、それが如意輪観音と対立される美しさであつた。櫃の天國だけに又格別の色彩がほどこされてあつた。

○丹波市

雨はげしく降り止みそうにない。バス、並鉄を利用して天理教の丹波市町についた。四時半頃になつていたろうか、すぐ雨にぬれながら宿泊所に向つた。何かエキゾチックな感じをえる。道行く人は「しるし半纏を着て、背に天理教と白く染めぬかれてあつた。まさに老いも若さもあるし半纏と云いたい風景、古くから本山をもつ町だけに本山に通ずる道路は舗装されてあつた。

本山は威圧されそうなき大きな鳥居、本殿、大建築そのものであつた。遠くから見ると東大寺の大佛殿を見た椽な雄大な感を受けた。こゝに来ると人間の持つ宗教力の偉大なるを痛感する。先入観であるうか道行く人々までがしつとりとした感を抱かせた。天の理に順応し一切の執着を断つて奉仕の精神、相互扶助の精神に生きる事が神道の一派天理教の根本精神であるが、道をたずねても物靜かにしかも丁寧に教えてくれた。

科学と宗教は常に対立的立場におかれているが、科学的世界が拡大するにつれて又宗教的世界も拡大して来ている。しかし人間から宗教的な感情を取除く事は出来ない。いかに科学者が合理主義を確立しても、人間自体のつびきならぬ「生」の矛盾が存在するのである。だから科学、宗教と別々に一面をのみ見て、人間とどう事を考える事は危険であると共に、現実的人間の「生」に根本的に矛盾するものである。勿論これは一面であるが、何れの問題においても同様であるうと思われるが、結念に生さることはそれ自体幸福であると思われる。高安大教会に荷物をおさに行つてこの様な事を感じた。

荷物をおいて天理教団で幼・小・中・高・大学と一連の教育機関が造られてある天理大学に行つた。もとより見学がその目的であつた。図書館の如きに至つては近代の建築で内容も貴重な集書があり、日本でも定評のあるだけに実に充実準備したものだった。天理大学では本学多田学務部長の紹介状を頂いていたので、特に尊遇を蒙うした。事務局長や学生課長が一室を設けられて、当学建学の由来に就いて説明せられた。

帰りには道路の左側に真新しい参考館を見学した。これは世界各地特に東亞、南方並細里民族の生活様式を被にわたつて蒐集されてあつた。これらの材料を通じて宗教的情趣と布教精神を養う様に思われた。

はだ寒い雨は更に止まず、でも幸い高安大教会で今がかりられたので濡れずにすんだ。二階造りの大きな建物が中央の道を中心にして左右に四つ五つ並んで居る。一日のつかれをいやす高安大教会の風呂の一時もまた格別の思いであつた。親しくその環境に起居して中世教団の発展に就いて発明する処が多かつた。

(都築 主税)

◇第三日

岡田旅行亦三日目を迎えた今日、朝まだ明けさらぬ天理教高安大教会の才四号館の二階。突然けたくましいスピーカーの声、我々は旅の眠りを覚まされた。如何にも戦時中の合宿訓練を思わしめるものがあつた。国鉄丹波市駅九時二十八分発、一夜を過ぎたこの町と惜別して宇治に向つた。

○宇治平等院

十一時半宇治平等院着。道中には名にし負う宇治茶の香り高さをかいでみしやっしめれ、とばかりにお土産品を店頭探ましと展べている。時々いさな店嬢の酸らしき客止め声が聞こえて来る。

朝から曇天の空模様にはどことなく気分がす々れなものであるが、今日に履つてのさかである。宇治川の清流に臨める平等院の雄偉な姿を見ては、難しむ感歎する。昔からよく「極楽を見たのならは宇治の平等

院に参詣せよ」といわれてゐるが、本日こゝに参つたことは何の縁であらうか。それ程この平等院の鳳凰堂は極楽浄土をそのままよくあらわしている。一行は先ずこの鳳凰堂を背景に記念写真を撮つた。拜観受付に吸付けられる椽に駆けていく交渉椽の御苦労には並々ならぬものがある。寝念はことに鳳凰堂金襴を見ることは出来なかつた。それは大へん傷んでいるための修理である。唯その右一翼の双昔の面影を残しているのは我々のせめてもの慰めであつた。

さてこの堂の中に入る。宗内役を務める一青年生徒が何かと詳しく説明してくれる。我々も成程と頷く。

鳳凰堂の名は屋根の上に鳳凰が飾られているからである。誰かゞ横から云つた。この池に倒影したら鳳凰の両翼を拡げた形ちになるであらうと。この建築は藤原時代の盛期天喜元年(一〇五三)の頃藤原頼通によつて建てられたものであり、藤原時代の最も代表的な阿弥陀堂建築であるが、その細工の細やかな真など何となく浄土思想の漂つている椽な気がする。京を東に遠く離れたこの宇治川畔の静かな山水の環境に、榮華に倦きた公達が自然の中に溶けこむ一時、彼等の心の中に又一新境地が甦るであらう。堂内には巨匠定朝の作、阿弥陀如来の海の如き慈悲溢るゝ像を中心にして周囲の壁や扉に未迦図が描かれて、一層信仰的な雰囲気を感じ厚にしている。境内には圓空の石燈籠や、源三位頼政

の最期の地の崩の芝、墓碑などもあつて、そゞろに懐古の念に打たれた。正午過ぎ宇治の茶屋で名物の茶を呑む。お腹の空いたのをいゝ幸いに数回ものお代りしたのは考古主義とはかり言えまい。宇治から京都に向う。小寒い風に吹かれながら取返に立つのも味がある。替もやゝほころびかけたそここの桜樹にも時の来るのを一日千秋の思いで待ち飽かしている椽である。歩先は真直ぐに桂离宮へと向けているのだが、藤井先生の旅足の急がれるのをおも入ゆかつて、途中幾多のエピソードを残し、新大阪桂駅で下車した。

○桂 離 宮

廿五分向江余田折いつも我々同道される先生と敬談ささざる中に离宮事務所に着いたのである。案内人の説明付で教寄屋風の書院建築の内部を古書院中書院新御殿と具さに拜観し、更に廻遊式庭園の名作として知られる庭園を、池をめぐつて松翠亭賞花亭、笑意軒、月波楼と茶屋をつなぐ苑路に従つて一巡した。离宮内の御殿造庭園に人工至甚の粹を窺われられたもので凡そ一般庶民の遙か遠く及ばない生活の程が窺われる。桂离宮に就ては多くの成書があるから茲に略しておく。

离宮を出たのは午後五時半、一行は最後の宿泊所である嵐山花の寮に向う。先生には今晚八時五十分京都発でお帰りの由、時間の迫りつくあるにも拘らず嵐山まで同道して下さつた。

(櫻井 芳郎)

◇ 那 四 日

ザーザーという桂川の水音に曉の夢を破られて私達は飛び起きた。窓をあけると朝霧にかすんだなだらかな山々は、いかにも京都らしく静けさの中に沈んでいった。私達はそうして静かな朝の大気を胸いっぱい吸いこんで「今日で旅も終りぬ」としみじみ語りあつた。八時頃一同本町に乗り朝食をとり、委員から今日の日程をきき、八時半過ぎ各々旅装をこゝのえて花の家をあとにした。

さち／＼と朝日に映える桂川にそつて、いさ左へまがれば向うに国鉄嵯峨駅が見える。国鉄はラッシュ時ですこい混みかた。突如朝の気持もどこかに吹飛ばしてしまひそうである。

やつと二條駅につき、しばらく商店街を歩くと少し離れ所に、桃山時代の城廓建築の粹といわれる二條城の姿が目についた。それは百垣といふ門といふ、二の丸といふ、白と黒のたゞ二色であるが、如何にもどっしりと落着いて威厳があり、その姿は当時の武家社会全盛時代を物語るに十分である。我々は千古の水をよどみたゝえを濼に古をしのびながら寫眞をとつたりした。しかしその頃から雲ゆきが変り始めたし、日影の多い事も考えて、それは外からの過去の面影をしのんで、歩を京都御所にど運んだ。

○ 京 都 御 所

千年もの長い都の中心京都御所、幾度か建てかえられた部分の多い御所ではあるが、我々が歴史という言葉に対して持つ概念の爲か、又そのものの持つ歴史の古さの爲か、何か京都御所の前にくると身のひさしまる思いがした。しかしそれかといつて私達は、御所に前にみた二條城の杯に感正は少しも感じられなかつた。それは何故かと語らあつたが、それは京都御所はどちらかというと平面的な感じがするからだ。堀もなければ石垣も天守閣もない。何の防禦施設のいかめしさもない為かと語りあつた。そうすると京都盆地という地の利を得て、たいらで、やすらかな都であれと平安京と名付けたという事もうなすげぬ気がする。

御所で最初に見たものは白砂の奇麗な掃き清められた紫宸殿であつた。左近衛、右近衛を前にして素木造の松皮葺の清浄簡素な紫宸殿の姿は、如何にも一幅の絵の如き感がある。そして白砂にある板と橋を見るにつけても、平治の乱の平重盛と源義平の争いが思いつかべられ、幾多の人がこゝで死に、幾多の人がこゝで名譽を競いあつたかと考へると、この白砂の一つ一つに感無量のものがあつた。次に清涼殿、弘徽殿、其竹漢竹を見て、その昔十二単衣の姫君達が列して催された歌合せや歌流しは、如何ばかりであつたらうかとも想像した。

それから渡などを拜見して御所をおとにし、藤井先生の紹介状を持つて京大へ向つた。先生は十数年に亘つて京大の講師であつたとのこと。

○京 都 大 学

京大ではあいにく林暇中で梅原教授始め職員方は不在であつたが、大学院の研究生の方が非常に親切に、考古学、国史、地理学の資料室を見せて下さつた。二部屋もある考古学の陳列室には、部屋もせましとはかり沢山の日本の縄文、弥生、古墳時代のものや、東西の考古学の資料が並べられてあり、国史の室では非常に得がたい古文書を多く見る事が出来て、私達は驚くと共に、私達の史学科にもこうしたものが欲しいものだとつくづく感じた。

昼食を会議室でとつて京大を出る頃は、たれこめていた蟻も切水薄日がおれはじめていた。私達はそこから銀閣寺に向うべく市電に乗つた。

○銀 閣 寺

市電を降りて三々五々北山の銀閣寺へと歩を運ぶ。内前町のみにごわいそれとはからぬ所に入口がある。さすがに名所だけあり見学の徒が多い。美政の料をこらした夏園が先づ眼に入る。彼が風流を奏しんだ山荘と言うだけあり、一本の松、一個の石にすら意を用いられた趣をうかがい知る事が出来る。東求堂より小径伝いに夏園を散策しながら、其の昔、室町

公卿の歩きつゝ月を詠み老を詠みした林など思いつく、中頃に至り銀閣寺を池の彼方に眺める。其の小じんまりした形よく周囲に調和し、而も明るく軽快である。東山の金南寺になぞらへて造られたものかどうだが、規模小さく、又つくりも一方の渡殿造りに比し之は武家風の書院造りで極めて簡素であり、淡泊瀟洒を好む當時の氣風がよく現われている建物であつた。

銀閣寺を辞し散歩を行かぬに、因柱の昏りしきり。思はず歩を休める。それは京名物八ッ橋を焼いているのであつた。何故八ッ橋が京に限られ作られるか。又その名称の由来はなどと考えて見ると、なにとなく昔、在粟葉平が東海道を旅した時、三河の八ッ橋という地を通り、その橋多きを面白がり、ふみを都に書き送りしなどの一節から起つたものではないか等と思ひ、之等の事を暇の時に調べると又興味深いのではないかと思つたりした。

○八 坂 神 社・知 恩 院

市電を四條河原町で降り、京都の最も繁華な町京極の道りを右、左と眼を留めつゝ通る。何となく東京と違つのは鉄筋コンクリート等のいかめしい店屋の無いせい。後にすぐ山の棘の眼に映えるせい。

つぎ当りに味塗りの鳥居が見える。之が京技に親しまれるという八坂神社。拜殿でかしわ手する。すぐ裏手が円山公園である。公園の芝生には春の人数が多く

又茶屋も軒を並べている。……

道ぐ取前に之はまた何と偉大な驚く許りの大寺院、知恩院の山門が喜笑として聳えている。斗拱は唐様で実に見事である。本堂まで長い階段一しきり。本堂大方式小方式等広い境内の木立の中に散在している。うぐいす張りの廊下も面白く、旅の疲れに笑をさそう。

○清水寺

知恩院を後に清水寺へと急ぐ。空模様漸くあやしく、明けししい風しきりに雨をさそう。突如沛然たる豪雨に旅の足すゝまず。みやげ物屋の軒先へ避ける。此処の土産物屋は陶器が多い。有名な清水焼である。美しい杯々の陶器を見ているうち雨も上り夕日かさしこむ。ホツとして空を眺め参道を登って行く。雨後の夕日にくっさりと塔が美しい。本堂は崖にのそんで建てられている。そして長く何本も大きい柱が立ち並んでいる。本堂の尖端の乗舎の欄干にもたれると、京都市の全景が覗渡される。暮色漸く濃くなりゆく京市街は、周囲の連山のふところに抱かれ、千年の歴史をよどませて居り、彼容として動かぬ自然と人智の限りを盡した殊枯盛衰の姿を思わず考えさせられた。

左右の翼廊（即ち乗舎）の真中に板敷の少し高くなつた所が所謂「清水の舞台」である。本堂内に入ると有名な平紙鞍馬がいくつか懸っている。多く色朽ち黒ずんでいるが、それでも赤白漆等はいくらか色が残り、

よく見ていると書かれてある絵がはつきりしてくる。天龍寺鞍馬の大きな鞍馬は当時の風俗等を知るによい史料となるのだそうだ。

眞の院を廻り帰途につく

○方廣寺、三十三間堂

旅も愈々終りに近付き、八時迄に歌に乗合の約束のもとに自由解散し、あなたこなたと見残した跡を辿る。「国家安康し、有名なる方廣寺の鐘、例のその字は鐘の上部に美に細字でかゝれ、白墨でしるしかなければ見る事が出来なは位。五つさ十円で鐘をついて見る。そこから一丁足らずで三十三間堂。日本一長い一棟建築で実際は六十五間からあるそうだ。その裏手に、その昔強い弓を競つた三十三間通し矢の弓場がある。突に古都らしい趣きを感ばせている。

かくして予定のコースを大体順調に終り、たぞがれ道る中を京郭駅へと向う。

私は京都の町は本當に過去の姿の如美に見られる町だと思ふ。千年の京都の歴史は又、日本の政治史の中心をなすものであった。その中で入々は生き、次々と滅んで行つたのである。多くの神社佛閣はその時代の入々の秘められた頼みの結晶とも言える。そうして現代の京都の多くの特徴はそこに有るだろう。

京都の生命村之等の遺跡をなくしたら又失われてしま

うであらう。此の祖先の残した京都の神社佛閣を始め多くの名所と我々の日々の生活とは、全くその目的から見て分離している。即ち我々の日常生活とは無関係とみるは支那の見方だろうか。だからといってそれを捨て、省みないのは又まちがっている。美術的に学問的に偉大なる価値をもっているのである。之等の文化遺産は絶対的価値をもつものなのだ。我々の力を以つては、如何にしても再び建設する事の出来ない時間と空間のもつ産物だ。

私達は京都見学の僅か二日の行程のあわたしさを惜しんだ。もつとゆつくり、もつと静かに、そしてもつと深く京都や奈良の古京を旅して見たいと語り合つた。それよりも一年三年と住んで見なければ分らないと。

入時五十分京都発明星で親しみある京都べんの歌員の声に皆で微笑みつゝ車中の人となる。汽車は旅々の旅の語り草を御土産に一踏東京へと向つた

これは余談だが今度の旅行を通じ、三年間の学生生活を通してさへ知る事の出来なかつたお友達を、大分知る事が出来た事もよい収穫の一つだった。本當に楽しく又勉強になつた旅行だったと感謝している

西原 温子
宮氣 義子

感想

教授 藤井甚太郎

近年種の情濃かであつた奈良、京都地方に、学生二十名近くと、数日研究旅行を共に為し得たことは誠に幸であつた。学生と云うものゝ、校内を一步出れば皆社会上相当の地位にある人々であるのが、学生らしい一行として、一絲乱れず、何等の故障もなく和氣藹藹の裡に、研修の目的を達せられたことは、幹事諸君の勞を多としなければならぬ。たゞ遺憾とする所は、小生の学足らず、學術的指導の上に欠くる点多かつた事である。

関西史跡調査旅行隨筆

四年 酒巻 正三郎

一、三月二十九日の夜、東京駅を発つ時に、竹内先生、丸山先生はゆさ／＼一行の爲に発車（二十三時）まで居残つて見送られ、特に車中の茶菓までも配布された。そのあたゝかい心やりは、人々の胸の中に永く忘れぬ力ないで残ることであろう。今回の行を共にするもの十八名、引奉者は入内味そのものゝ様な温泉入に迫る我等の史学会長藤井先生その人であつた。視察の成果が満足すべきものであつたのも蓋し當然であつた。

二、三十日の朝は名古屋で明けた。車中はヒーターが絶えて寒かつた。下外套を着て来た人に勝たれたなし

と私の服装を指して都築さんが「ゴホン」と咳をし
ながら云った。

奈良宿泊所は思ったより立派だった。荷物をあつけて
予定コースの参観に移った。十年の都奈良は薬師寺に
も唐招提寺にも重仁陵にも感懐を湧かすに充分なるも
のがあつたが、正倉院の特別拝観を許さるゝに及んで
心は往古に遡り文化の連綿たるに驚嘆の声を発せざる
を得なかつた。

三、三十一日遂に雨を見た。日文科の卒業生六名の入
たち(女子)も別行動で同コースの視察をやつていたが、
流石に晴らなかつたグループも雨にはしよげ却つて淋
しやうだった。法隆寺五重塔は十年振りに修理成り、
正に威容を現わそうとしていたが、よくもまあ一二〇〇
年に亘つて風雪に耐え得たものと只眺める許りであつ
た。「法隆寺あゝ法隆寺、法隆寺」と誰かよ口ずさん
でいた。筒井の歌に「ホスターがあつた。「四月三日、
神武さん御参りて桜と共に賑わう」と行集を促したも
のだった。戦前であつたら不敬罪を以て嚴重処断せら
れたであらうことを思つて、その移りかわりの激しさ
をこの「神武さん」の語にかみしめたのであつた。

四、「天理大学ってどんなところだろう、宛に角天理教
会に泊らんがや、いれどうも参つたね、どうしても痔
ますはなをまい」とこぼしながら丹波市町へ行つた。
流石に所は天理教の門前町と云うか、こゝで、道行々

人の半分は全国から集つて来た信者の群で、一見して
それと分る却半鐘、肩にも天理教とぬき出してある。

本部は名にし負う一大牙威の観を呈している。然し結
論から云えば、こゝに泊つてよかつたと思つた。偶像
のない理論的近代宗教であるせいでもあるまいか、別
に拝みは強制されなかつたし、符憑は親切を極めてむ
しわばづかしい位だった。信者が孔時消燈下四時に起
きて拝みをする時も特に例外に扱われて、入浴の如き
も入浴しない目であつたが、特に一ヶ所だけたて、入
れてくれたのであつた。

幼稚園から四年制の大学まで全感する天理本山の威容
は一見に値する。その未だ関東にはよく知られていな
い圖書館や歴史資料の参考館等は予想以上にすばらし
いものであつた。参考館が整理を終つたに蓋し関西に
於ける一大博物館としての相を呈するだろう。

又特に朝鮮語とか、インドネシヤ語等の外国語に特異
性を見て癖しかつた。(三十一日)

五、「ふり向けは、あちらこちらにルシヤヤブツ、寺
沢さんや今泉さんと同じ列車のボックスに坐つて、宇
治の平等院を訪うべく車中にあつた時の旅である。今
回の視察の旅が全く満足すべき成果をあげられたも四日
目ともなれば流石に腹い難く、車中の人となり目を細
くしてあちらこちらで居座りを始める。その相満足に
似て田崎貞大慈悲大慈、かつこゝはさながらルシヤヤブ

ツを想わしめるものがあつた。

宇治の平等院は修理の途中にあつてその全貌はおさめられなかつたが、技術プロに迫る卒業生藤宮さんの力メラはこゝでも動いた。この日専売局から新装ピースの発売があつたが中味はやっぱり変わってゐなかつた。大学院で研究に余念のない田中さんも行を共にしたが、時々得意のユーモアを以て人々を樂しませ、明るい旅を貢献した。卒業生も在校生もみんな無邪気で、自身小学生の頃を思い浮べて「誰か故郷を思ふささし」と云うていの感傷に浸ることを得た。

丹治さん、椀井さん、安岡さん、寺沢さん等の今回旅行の委員さん達が「見れば何の苦もなき水鳥の脚にひまなき我が思ひかな」と云つた工合で、事細大となく相討り全行程がスムーズに運んだ旁は忘れられないであらう。(一日)

六、桂離宮参観の時であつた。午後三時むすびて申込に若干の手續上欠くる所があつて、もう少しで参観のことわりをくるところであつた。守衛の人から「ほんとうは参観をおことわりする外ないのだが、遠方から来たのだから電話で問合せを。兎に角一忘る前を書いて出してほしい」と云われた。

未発表には終つたが、かつて滿洲國憲法の制定に提要に参画した藤井先生が、後三位勲四等(旭日章)と書いて氏名を添え、学生十八名その左側に連記した紙を

出すと、俄に守衛さんの態度が改まつて丁寧となり、お蔭様で充分なる説明によつて内外くまなく参観する事を得たのである。丁度助さん格さんを伴つた黄内先生と云つた感じかしてなになかつた。

名にしおう嵐山の桜は未だ固く閉して開かなかつた。藤井先生が醍醐大学院創設に関する重要会議に列するため、此の日帰られた。京都駅まで御送りして宿舎に帰つた。(四月一日)

七、藤井先生が帰京の途に就かれたので年長の故か、後の事を托された。その托された最後の日は、京都御所の参観も桂離宮産蔵重ではなかつたので一安心、京大の研究室は大いに得る所のものが多く、特に古文書に於て興感を覚えた

「智恵院のウグイスバリは何だ釘のぬけた音かしと誰か、頓紙に叫んだ。見れば卒業生の野田さんがさかんにためしている所だつた。

最後の日驟雨に逢つたが、ソバ屋にかけこんで一抔たべて大男に長々とおちつかれては、ソバ屋も感慨無き能わなかつたであらう。

方広寺の鐘を十円で撞いて最後のコースは終つた。(四月二日)

大段を訪れた人も幾人かは居たが、主力は予定コースを四月三日の朝東京駅へ帰つたのである。湘南の田んぼの水が流い氷に閉ざされた寒い朝であつた。

個人では容易に視れないであらう視察を終えて、人々の心は満足感に満ちて居た。昼間忙しい仕事を持つ人々の思い切った研究心の発動による時間の捻出による旅であつたので、時間が自分の無駄なく計画消費せられたことは終生他山の石となることであらう。年に一度位計画せられることを希望し、併せて文字会の発展を祈りつゝ摘筆する。

郷土誌研究雜感

山下 文彦

私の住む西多摩村は江戸時代には武蔵国科島領村と呼ばれ、代官江川太郎左衛門の支配下に属していた。本村は玉川上水の取入口に當つていたので、当時役人の往來も繁く、又堰を境として上流よりの木材の運搬や、或いは下流よりの浮つて来る魚類の集る場所でもあつて、いろいろの意味に於て研究に値する村であつたが、さて詳細に調査しようとするとなかなか所々資料が見当たらないことが非常に多い。

例えは、古老の言によると、水役人の生活状態を記した柳陣屋日記等残つていたやうであるが、どこを探しても中々見当たらない。又当時の検地状況等詳細に知らうとしても分冊になつていて検地帳の一部が欠けていたり、或いは幕後、元和の検地帳がある。これ、又村史等には原文さえのつていないのに今は全く見当たらない始末である。資料ばかりが散逸してしまつたのだらうか、色々調査して見ると河も重要な資料だけ

が散逸していろいろであつて、その理由をよく尋ねて見ると至つて簡單である。

即ち古い物等とつておいてもねすみの窠になつたり、やつかいの上に見てもわからぬし、面目くないので整理してへ怪しい整理である。瓦名のためきつけにしたり、又古紙として紙質が良いのので高く売れるので売つてしまつたり、又茶室や茶箱等の目粘りに使用したと云うのである。中には先祖代々保存して来たが、若い件違は誰も興味を持たない様だから綴つてあるものは重要やうだからと云うので、之を茶室の様にして大切に藏してあるが、然し一枚一枚バラバラになつたものの中にも大切な資料のあることは忘れられていゝやうである。

以上述べたやうに大切な古文書が全く知らぬ間に、二束三文で姿を消してしまふことは、郷土誌研究上最も重要な資料とし、研究の中心として尊重しているが、我々がとつて筆舌に表現し難い口惜しさで云ふか、讀りと云ふか、一種憤怒を覚えるのである。この様な有様は單に古文書ばかりでなく、あらゆる方面に亘つていゝ様である。此等近世郷土誌研究資料の重要性は今更云々するまでもないが、この状態が今後何十年も続いたなら、地方に於ける重要資料の大半が失われ、所謂「殿氏文」は「特殊階級史」に對して、資料の豊

富さに於て対抗し得べくもなく、折角「國民の歴史」研究が緒につき初めた所で行き詰まらうき目にあわねばならぬ。さればこそ我々史學に志す者は、研究部門の如何を問わず、地方に散逸している資料の保存に力を注ぐべきである。

方法としては公民館、学校、役場、記念館又は篤志家等その近隣の地域の資料を一括蔵書するか、又は目錄を複製して各館にその重要性を認識せしめ保存方を依頼すると共に、宛も此尋民家に伝わる資料の散逸を防ぐことの急務であることを痛感した。いつか帰校の電車の中で小西先生からもこの採る趣旨の講話を伺ったことがあつたが、身を以て初めて体験して、あの時の小西先生の気持が幾分わかつた採る気がする。この稿を終つてから新聞で「國民の知らぬ間に登録のない国宝的美術品が外國に渡る」との記者を見て哑然とした。偶々私か史學に志しているのや嘘と見ただけなら幸であるが。(新制一回卒)

学内便り

○法政大学文学科の日本史専攻科大学院開講
新制大学制度による修士課程の本学大学院が、日本史専攻科として、廿七年度から定時制として認可せられた。定時制大学院は本学のこの科の外には、京都に一枝一科あるのみである。既に定時制の中学高校大学が

認められて以上、定時制大学院の認可せらるべきは理の当然であるが、それが仲々実現しなかつた。初めて本学の是科史が認可せられた。修業年限は三ヶ年履修単位三十単位、論文。本年度開講の講義は左の通り。

三四

- 日本史原典研究 藤井甚太郎教授
- 江戸時代制度史 板沢武雄教授
- 日本史演習
- 江戸時代海外交渉史 岩生成一講師
- 唐宋経済史 岡藤吉之講師
- 独逸近世史 杯健太郎講師

○文部省学術研究費交付認可

文部省は廿五年度卒業山下文彦君(西多摩小学校教諭)の、江戸時代に於ける東京都西多摩郡の歴史地理学的研究

廿六年度卒業芥川竜男君(法政大学第二高校教諭)の

玉川周辺に於ける村落の発達過程

歴史地理学的構造分析

に対し、前者は法政大学史学会の、後者は石田谷臣誌研究会の推薦を通して、夫々研究費を交付することを認可した。

○第二文学部に教育学科設置

昭和廿七年度から第二文学部に教育学科が増設され、日文、英文、歴史、地理と併せて五科を有する事となつた。これにより教職課程の専門科目は教育学科の設置科目により履修するようになった。

会務報告

三月二十九日(土)
四月三日(水)

関西方面研究旅行、参加者十九名、費用三千五百円、三月二十九日(午後)一時三〇分東京発、大和号にて出発、四月二日(午後)八時五〇分京都発明星号にて帰京(詳細は別項)

四月(四日)(月)

史学会委員会
藤井、竹内、丸山、和田各先生に櫻井、寺沢、林、安岡各委員及び酒巻氏、本年第一学期に於ける行事予定及び会報第四号の編集方針について協議、委員の事務分掌につき左記の如く決定。

四月(九日)(土)

庶務 寺沢委員(新四年)
会計 林 委員()
編集 安岡委員()
新入生歓迎会
午後五時三〇分より入番教室に於て
司会 酒巻正三郎氏
一、開会の辞 (酒巻)
一、会長挨拶 (藤井先生)
一、歓迎の辞 (寺沢)
一、史学会について(丸山先生)
一、単位修得方法説明(安岡)

五月(一日)(日)

一、懇談 藤井、竹内、丸山、和田各先生のお話、自己紹介(参加者凡そ四十名)
昭和二十七年度第一回史蹟調査
深大寺及びその近郷
参加者 藤井、竹内、丸山各教授
大学院、卒業生 三名
在学生 一〇名
(詳細は別項参照)

五月(四日)(土)

昭和二十七年度史学会總會及例会
午後五時半より 於十三番教室
總會決議事項 会則第六条の会費年額三百円を年額四百円に改正
一、本年度事業計画 秋季史蹟調査は一泊二日で実施の予定(行先未定)
例会講演
一、「東洋史家の見た古代日本」
東大名誉教授 和田 清博士
(詳細は別項参照)

出席者

藤井 板沢、竹内、丸山、和田各教授、岡藤 謙師、卒業生、大学院一四名、四年一五名、三年一八名、計五七名
終つて三年生より宮前、梯両委員選出さる。
(寺沢委員)

法政大学史学会会計中間報告

会報第3号掲載分以降
27年6月28日迄

収入之部		支出之部	
繰越	15,303.50	通信費	2,100.00
会費収入	33,758.00	交通費	175.00
現金 8,200.-		図書購入	570.00
振替 300.-		会報第3号印刷代	5,750.00
会計課 25,258.-		諸費	1,050.00
関西旅行残金寄附	1,293.00	27年度新入生歓迎会費用	1,860.00
会報第3号広告代	2,000.00	各種謝礼	2,300.00
		雑費	2,010.00
		計	15,815.00
		差引繰高	36,539.50
		内訳 (振替現金 3562.50 水増会計) (銀 30,058.- 現金 2,119.-)	
合計	52,354.50	合計	52,354.50

(林 委員)

旧制大学院学生並に研究題目

昭和廿七年度在学旧制大学院学生研究題目

徳川時代に於ける農業問題

鈴木 英市

江戸時代に於ける農民社会の構成と農民一揆

原 勇夫

日本近世交通史特に宿駅の研究

豊岡 是

津元による封建的滯支配

高山 茂

江戸時代に於ける河川渡渉政策に關する考察

渡辺善四郎

中国史前文化に就いて

田中 三雄

日本中世村落に於ける新興佛教諸宗の発展

金子 昭貳

特に眞宗本願寺教団を中心として

(順序不同)

◇昭和廿七年度史学科及關係講義題目

史学概論	講師 中村英勝	中国経済史	講師 周藤吉之
日本史概説	教授 藤井基太郎	東洋考古学概説	岡野 雄
東洋史概説	和田久徳	東洋史演習	
西洋史概説	和田久徳	西洋史特選講義	
日本史特選講義	竹内直良	キリスト教史	教授 竹内直良
郷土史	学教授 藤井基太郎	西洋史演習	
明治維新史		アメリカ史	講師 清水 溥
日本史演習		西洋近世史	中村英勝
日本社会経済史	板沢武雄	口シヤ史	幼場徳造
日本外交史		西洋美術史	今泉篤男
日本近世史		其の他	
日本古代史	丸山忠鋼	教育原	理野毅 林田不二生
史籍解題		教育心	理野謙一 寺沢巖男
日本史演習		青年心理	乾 孝
日本佛教史	講師 荻原一男	社会科学教育法	教授 小川 一
日本現代史	小西四郎倫	理	学講師 小松茂夫
日本考古学	青藤 忠哲	学	学講師 瀨川行有
日本古文書学	佐藤進一	図書館学	講師 足立正夫
東洋史特選講義		フランス語	教授 大井 征
印度史	教授 和田久徳	ドイツ語	末吉 寛
東洋近世史			

史 学 研 究 室 便 り

新制大学の機構が、旧大学制の機構

に比して、著しく相違する等は、図書

館の充実と、研究室の整備が、当局よ

り要求せられてゐる点である。新制ではこれが充実整

備の条件下に於いて、単位制が立てられてゐる。即ち

一時間の授業の外に二時間の予習復習研究が結び付い

て、初めて一単位の基準が掲げられてゐる。別けて大

学院などは、これが充実せられて、初めて意義を有す

るのである。そこで学校当局は勿論、教授先生方もこ

の奥に留意せられて、全力を挙げて、史学研究室の充

実に努力せられてゐる。我が法政の史学研究室の誇り

とする所は、今日の契、専門雜誌が多く収載せられて

ゐる点で、これは他の大学の研究室に比して決して遜

色はあるまい。併し理想郷に到達するには、尙遠慮な

るものがある。会員並に関係者の諸君は、著書の寄贈

とか、又は他の方法によつて、史学研究室の充実に協

力して欲しい。共用してゐた地理学科が他へ移り史学

科のみの部屋となつたし、助手の方も並々任命せられ

るのである。本学図書館の史学関係図書目録も近く完

備する。吾々はこの研究室から学界を裨益する多くの

業績が、世に問はるゝの日を待っているのである。

卒業生も在學生もこゝに入室して勉強されることを

望んでゐる。授業時間外に、自ら教師の方との接近も

容易く、繁くなることゝ思う。

編集後記

本号は先般行われた関西方面研究旅行の特

集という形になり、相当の紙幅をこれに割い

た。参加者にとつて、この会報は、忘れ難い

印象を残した意義ある研究旅行のよき記念の

誌となり、又思い出のよすがともなるであら

う。又都合で夜愈にも参加出来なかつた方達も、この

記事から旅行の内容を察していただければ幸である。

◇

本号の発行に當つて協力して下さつた先生、卒業生

並に在学の諸兄には深く感謝する。殊に会長藤井先生

には編集者の行届かなかつた為、一方ならぬ御手数を

煩わした事を申訳なく思う。

◇

本誌の性格についても、従来種々論議されて来たが

學術論文集の発行計画ともならみ合せて、次号あたり

ではつさり方向を確立する必要のある事を痛感する。

中途半端なものに止つてゐては、結局対内的役割も対

外的意味も、共に十分には果し得ない事になつてしま

う。この長諸賢の批判検討と併せて積極的な御決力を

切望する次第である。

◇

前次号の発行は二八年二月頃の予定であり、又会員

名簿も今秋発行の運びとなつてゐる。(編集委員)